

【荒神(神事舞)】

災いや病気などを引き起こす神(荒神)の心を鎮める鎮魂行事として演じられる備中神楽です。
1年に1度特定の日に行われる例大祭や、7年もしくは13年に1度行われる式年祭で演じられています。また、9月から11月にかけて神社の秋祭りなどで奉納されることもあります。

【役指】

祭主から当日の祭典や神楽、その他一切の役割を申し渡すための舞。(写真①)

【神舞】

鈴の舞、幣の舞、櫛の舞を順次1人で舞う。素面で巫女舞の型であり古くからあった神事舞。神楽を始めににあたって神楽場、奉仕者などを清めるための舞。(写真②)

【白蓋】

神殿、奉仕者、氏子などを清めたあと、荒神をはじめ八百万の神々を勧請し鎮座を願う神事。(写真③)

【導き】

猿田彦命の由来を説明する舞。神楽舞の基本となっている「曲舞」の型で舞う。

【猿田彦命】

天孫降臨の際に天の浮橋に立つて先払いをしながら、瓊瓊杵尊の一行を先導したといわれる神。猿田彦命の舞は2人、4人、5人舞のこともあるが、現在は4人舞が定着している。



猿田彦命

【五行(旗分け)】

神代神楽創作以前より伝えられる神楽。神代神楽が入ってくるまでは五行神楽が備中神楽の主要部分であった。演舞というより語り中心のものである。かつては五行思想の天地万物の相生を神職たちが語り合い、論争が激しいほど荒神が好むとされていた。(写真④)

舞うことが楽しい

成羽備中神楽育成会 川面小2年
丸山 拳志郎さん(高倉町飯部)



3歳で舞い始める

小さい頃から両親と一緒に備中神楽を見に行っていました。だんだん自分で舞いたくなり、3歳から習い始めました。現在は「成羽備中神楽育成会」に所属しており、毎週水曜日に成羽文化センターで午後7時から練習しています。

最初は備中神楽独特の動きや言いたて(セリフ)を覚えることが大変でしたが、厳しく、そして優し

勇気を出して迫力ある舞を

福祉施設や敬老会、地域のお祭りなどで備中神楽を披露しています。多くの皆さんの前で披露するためとても緊張しますが、舞い終わったときやポーズを決めたときに拍手が聞こえてくるとうれし

い指導者の皆さんが分かりやすく丁寧に教えてくれるので、楽しく覚えることができます。

く、備中神楽をやって良かったなと感じることができます。面白くて迫力ある「大蛇退治」が好きだったので、今、実際に演じることができてとてもうれしいです。

備中神楽を始めて約5年になりますが、これからも大きな声を出して、また人前で舞うときには勇気を出して頑張りたいと思います。大人になっても備中神楽を続けて、いつか小さな子どもたちに教えてあげたいです。



西林國橋

明和元年(1764年)、今の落合町福地の神主、西林玄蕃忠盛の次男として生まれました。

國橋は青年期に神道や国学を学んだ後、京都へ出て国学を学びました。文化元年(1804年)に帰郷した後、母の生家であった日名村(成羽町上日名)で神官を務めるとともに、子どもたちに国学を教えました。國橋はかねてから荒神神楽が基本的な芸能要素だけではつまらないと感じていたため、「古事記」や「日本書紀」に題材を求めた演劇風の神話劇創作に取り組みました。そして誕生したのが、「大蛇退治」「岩戸開き」「国譲り」の三編で構成した神代神楽です。國橋が基礎をつかった神代神楽は、神楽面と衣装の華やかさや美しさを競うようにもなり、郷土芸能としての備中神楽を代表するものとなりました。



頭影碑(成羽町下日名)